「薩摩守忠度」の上演年代について

近松門左衛門の初期の作に、「薩摩守忠度（さつまのかみただのり）」がある。この作は、後の「主馬判官盛久」と、二部作となる前半であることは誰もが知つてゐる事である。そして「忠度」と同じく門左衛門の作である宇治加賀掾の語り物なる「千載集」と殆んど同一で、只「千載集」の辭句を洗練したのが、この「薩摩守忠度」である。これと同じやうに、近松の作で宇治加賀掾の語り物に「盛久」がある。これは「主馬判官盛久」の前に「盛久」が出來てゐて、加賀掾の語りものとなつてゐたことは、「千載集」と「薩摩守忠度」との關係と同じである。

この近松の四作ともに、その上演の年月が不詳である。藤井乙男博士は、「千載集」の製作年代を、忠度の五百年忌に相當するといふ理由を以て、貞享二年と推定し、「忠度」をそれより數年後の修訂であらう（近松全集第二卷）といはれてゐる。

ところが、私の家藏の「忠度」は十二行、三十二丁本で、幸に奥付があり、左の如く記されてゐる。

竹本義太夫

近松門左衞門作
貞享三丙寅初冬吉辰
大阪堺筋正本屋九兵衞版

で、元表紙であるが題簽がなく、第一丁目の書出しに名題もない。とつかけから

第一　壽永忠度（じゅえいたゞのり）　ばけたるおとこ　きつね川より

とあり、

第二　西國忠度（さいこくたゞのり）　しばをるむすめ　山人とこそいふべけれ
第三　短冊忠度（たんざくたゞのり）　わかむしやすがた　たんじやくを付られたり
第四　述懷忠度（じゅつくわいたゞのり）　たびのかさでら　花こそあるじなりけり
第五　世繼忠度（よつぎたゞのり）　進上御大刀　源氏の住所千秋萬歳樂

と、五段になつてゐる。「薩摩守忠度」であること疑ふべくもない。

これによつてみると、近松門左衞門は、貞享二年に宇治加賀掾に「千載集」を書與へ、その前年に道頓堀に櫓を揚げた竹本義太夫のために、「出世景清」を、貞享三年二月四日に上演せしめ、その冬に義太夫に與へたのがこれで、前年宇治加賀掾に語らした「千載集」に加筆して、「貞享三年冬」にこの「忠度」

が上演されたものであらうと推定される。

然らば「主馬判官盛久」の上演年月はと問はれても、私は知らない。私はたまゝこの「忠度」の奥付のある十二行本だけを手に入れたので、その上演年月だけを報告しておく。（昭和三年十一月）